

明治維新と霧島

お金から見る

明治維新



明治維新と霧島

お金から見る

明治維新



いあごやひ

平成三十年度は明治維新一五〇年の節目の年であり、大河ドラマ放映をはじめとして鹿児島県内各地で、明治維新についてとても盛り上がりました。

本市にも明治維新に関する史跡や文化財、逸話などが多く残っています。そういった市内の明治維新に関する歴史を紐解いてみると、「金」というテーマが浮かび上がってきました。そして、「金」を通して本市がいかに明治維新とつながっていたのかということがまじまじと見えてきます。そこには、金のように輝かしい業績もあれば、廃仏毀釈のような反省すべき歴史もありました。

そこで、平成三十年十月十六日～十二月二十四日まで、「明治維新と霧島～お金から見る明治維新～」と題して霧島市立国分郷土館にて企画特別展を行いました。この企画展では霧島に残る資料を通じて、明治維新と霧島とのつながりを紹介しました。本書は、この企画展で展示したものをより多くの方に見ていただくよう図録化したものです。本書を通して霧島と明治維新の関わりをどうぞ御確認ください。

最後に、企画展を開催し、本書を刊行するにあたりまして、資料の調査や貸出などで多くの方に御協力いただきました。厚くお礼を申し上げます。

目次

ごあいさつ
目次・凡例

プロローグ

金がかかるよ明治維新	6
薩摩藩と西洋の最新式武器	7
霧島の郷土・椎原家	8

第一章

金が採れた山ヶ野金山	10
山ヶ野金山・金の採り方	12
天降川の川筋直し	16
近代化について	17

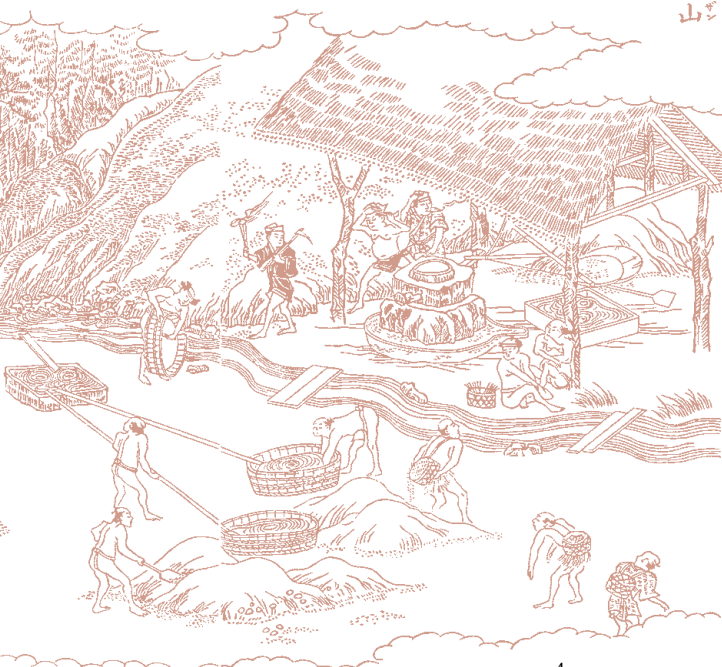
第二章

金を返した調所広郷	18
調所広郷	20
調所家所蔵品	21
調所による薩摩藩財政改革	24
調所広郷と霧島市のつながり	25
調所広郷と薩摩焼	26

第三章

金を造った国分の銅	30
薩摩藩による偽金づくり	31
国分の銅山	34
仏を壊す廃仏毀釈	36
仏の鐘は薩摩の金へ	37

キン
ザン
山



第四章

金を見通す桂久武	38
薩摩藩家老 桂久武	39
都城県と桂久武	40
霧島を拓いた「桂内」	44
知られざる偉人 桂久武	45

エピソード

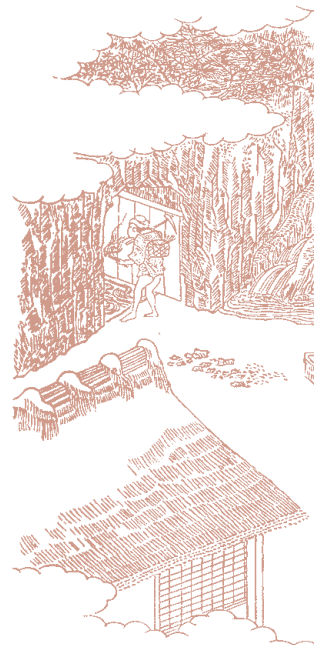
金より休暇な西郷どん	46
西郷隆盛と日当山温泉	48

主要参考文献

.....	52
-------	----

凡例

- ・本書は、平成三十年（二〇一八）十月十六日～十二月二十四日に霧島市立国分郷土館で開催された企画展「明治維新と霧島くお金から見る明治維新」の展示資料をまとめた展示図録である。
- ・企画展及びこの図録は「平成三十年度鹿児島県地域振興推進事業」によって作成した。



プロローグ



がかかるよ明治維新

明治維新を薩摩藩が主導となって成し遂げることができた要因として、優れた政治力もありますが、大きな軍事力があつたことが挙げられます。

薩摩藩は島津久光の率兵上京から始まり、禁門の変、戊辰戦争など、様々な場面で強大な軍事力を背景に政治を進めていきました。この薩摩藩の軍事力は、藩独自の外城制度による郷士の存在によって支えられており、他藩に比べて鍛えられた武士（兵士）の数が多かったことによります。それに加え、西洋の先進的な武器を使用することができたという面で大きな強みがありました。

幕末の薩摩藩は、イギリスから最新式の銃や大砲、軍艦といった武器を大量に購入していました。海外の最新式の武器をそろえるのには大きな資金を要しました。また、実際に武器を使う武士たちも、武器や防具を自分たちで揃えなければいけませんでした。薩摩藩の軍事力は、藩と武士たちのお金によってまかなわれていました。明治維新を成し遂げるためには、多くのお金がかかっていたのです。

薩摩藩と西洋の最新式武器

西洋列強の脅威は、海に開いた薩摩藩がいち早く感じ取っていました。

西洋の学問について造詣の深かった第十一代薩摩藩主（島津家第二十八代当主）島津斉彬（なわぎ）は、西洋列強国に日本が植民地化されないように、西洋の技術を導入して軍事力の強化を行うべきだという考え方をもっていました。そのため、鉄製の大砲を作るために反射炉を建設し、蒸気機関の製造工場など多くの西洋の技術を用いた工場群をつくりました。また、洋式軍艦などの建設も行い、軍事力の強化をしました（集成館事業）。

斉彬の死後、その意思を引き継いだ島津久光（ひまかつ）は、第十二代藩主（島津家第二十九代当主）忠義（ただよし）の親（国父）として文久二年（一八六二）千人余りの兵を率いて東上し、薩摩藩の軍勢力を背景にして幕政改革を行いました。しかし、直後に起こった薩英戦争では、イギリスの軍艦により薩摩藩の砲台は壊滅します。西洋列強国の軍勢力を目の当たりにした薩摩藩は、その後、イギリスと友好関係を結び、使節団と留学生を派遣します。このとき、使節団の藩士たちはイギリスから最新式の銃や軍艦などを購入するよう動いていました。これをきっかけに、エンフィールド銃（前装式銃）やスナイドル銃（後装式銃）といった西洋の最新式の武器が大量に輸入され、武器の近代化が進められていきます。

薩摩藩はいち早く武器の近代化に目をつけ、手に入れた最新式の武器をもって戊辰戦争（ぼし）などの戦いを勝ち進めていき、明治維新を成し遂げていきます。

スナイドル銃

【国分郷土館蔵】

イギリスのエンフィールド銃を後装式に改造した小銃。戊辰戦争の頃から薩摩藩に導入された。

【幕末～明治】



霧島の郷士・椎原家

椎原家は現在の霧島市霧島田口に居を構えていた郷士（地域の武士）です。椎原家には多くの資料が残されており、なかでも幕末から大正にかけての日記は、当時の様子を知ることができる貴重なものです。

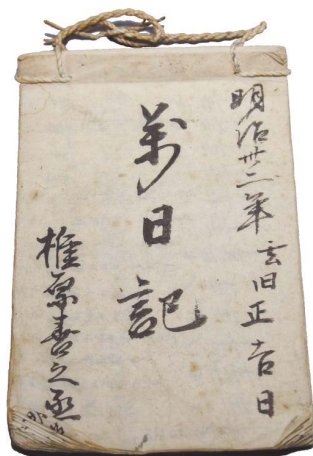
日記によると、元治元年（一八六四）に椎原八郎右衛門という人物が京都へ上り、御所警備などをしていました。その際、薩摩藩・会津藩が長州藩と激しく戦闘した禁門の変（蛤御門の変）にも参加した様子が描かれています。

このような戦いに備え、京都に上った薩摩藩士たちは「訓練」「銃宛射方」「大砲稽古」といった銃や大砲を使った戦いの訓練を毎日のように行っています。

このような武器や防具はどのように準備していたのでしょうか。椎原家には鎧や陣羽織を購入した際の領収書が残っています。自分が使うものは自分で購入するといったところでしょうか。藩からの支給だけではなく、自ら支出して戦に参加していました。また、京に上るなど、戦地に行くためのお金も多少は捻出しなければいけません。自分自身でお金を出したり、地域の人からの出資金をもらったりしていました。

しかし、京に上った戦いだけではありません。椎原八郎右衛門は、京のお祭りや有名な神社、茶屋や酒屋などにも頻繁に出かけている記録を残しています。仕事でもせっかく都に行つたならば、観光しないわけにはいかなかったでしょう。しかし、その遊ぶお金はいったどこから…

幕末になると武士は出兵で遠征する機会が多くなります。戦のための準備費・出張費・観光費…お金がとことんかかってしましますね。



しいはらけ よろず につき
椎原家 萬日記

【霧島歴史民俗資料館蔵】
霧島の椎原家に残る日記。幕末から明治、大正にかけての記録であり、霧島地域の武士（士族）の暮らしの裏面がわかる資料である。

【明治時代】



陣羽織

【霧島歴史民俗資料館蔵】

戦の際、武士が具足（鎧）の上に着用した袖なしの羽織。霧島の椎原家に伝わるもので、幕末に購入したものではないかと考えられる。

【幕末】



陣羽織仕立代

【霧島歴史民俗資料館蔵】

文久三年（一八六三）、椎原八郎右衛門が京都三井本店にて陣羽織を仕立てた際の領収書。

【文久三年（一八六三）】

第一章



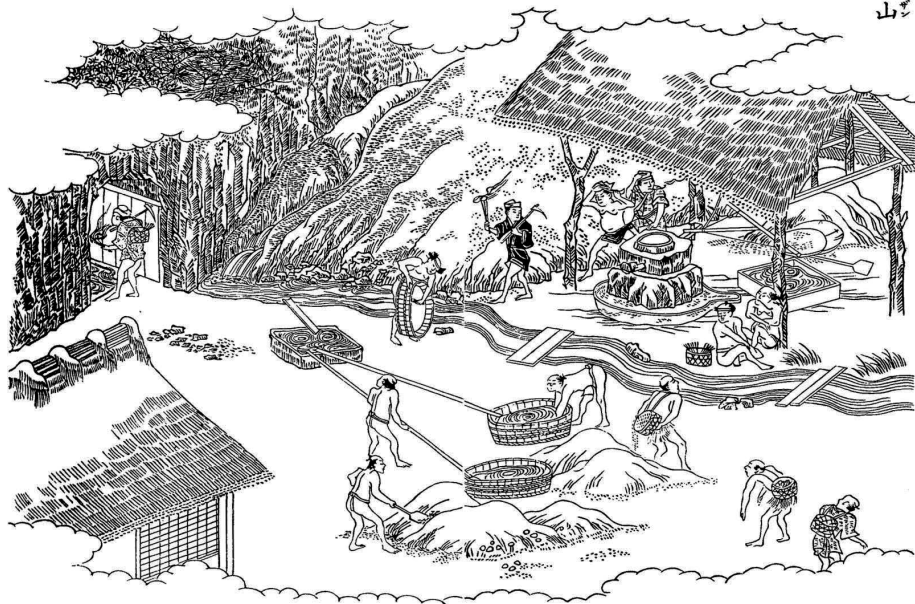
金が採れた山ヶ野金山

江戸時代を通じて、薩摩藩では金が多く採掘されています。現在の霧島市横川町に位置する山ヶ野金山は、一時は日本一の産金量を誇っていました。

山ヶ野金山は寛永十七年（一六四〇）に発見され、その後多くの採掘者で賑わいました。日雇いの職人などもあり、薩摩藩の直轄で採掘作業が行われ、その収益は藩の財政を潤わせました。また、現在も市内を流れる天降川の川筋直しのための資金として、山ヶ野金山からの収益金が使われています。

江戸時代後期になると、採掘場所が地中深く、作業が困難になったため、金の産出量も減少します。しかし、藩は主要産業の一つと位置付け、島津斉彬や忠義などが視察に訪れました。明治以降は、フランス人技師を招き、西洋の技術を取り入れて、いち早く近代化を果たします。鹿児島県内ではいち早く建てられた発電所である霧島市隼人町の水天渕水力発電所は、金山の設備を電力に切り替えるためのものでした。

江戸時代には薩摩藩の財政の基盤となり、その重要性から県内でいち早い近代化を果たした山ヶ野金山について御紹介します。



金山の様子

さんごくめいしょうずえ

『三國名勝図会』

天保十四年（一八四三）に編纂された薩摩藩の地誌『三國名勝図会』の中の金山に関する挿入図。一か所の説明で五枚にわたる絵が挿入されるのは珍しく、薩摩藩における金山の重要性がわかる。

当時の風俗や金山での作業の様子が伺える。

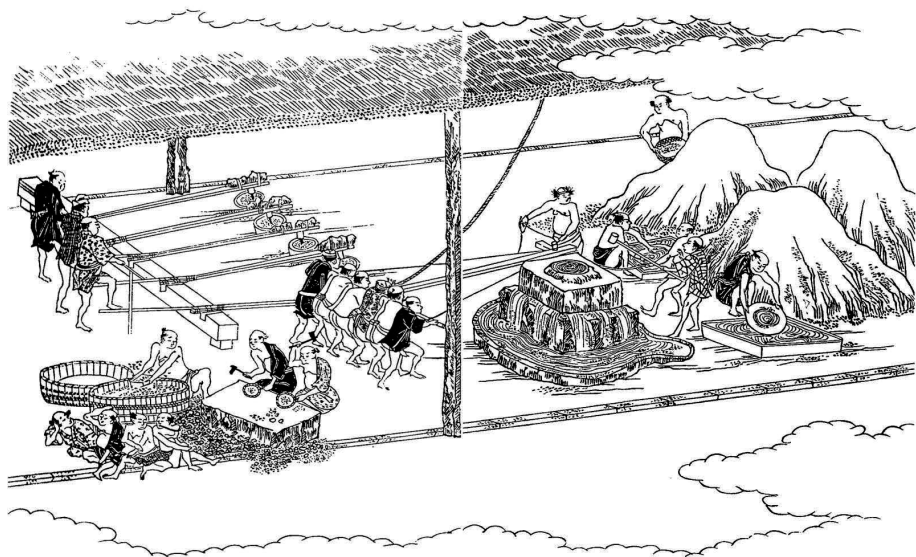
【江戸時代】

金鉱石

きんこうせき

【国分郷土館蔵】
金が含まれている鉱石。山ヶ野金山が発見されたとき、金鉱石がまるで赤牛が伏せているような姿であったと伝えられている。





山ヶ野金山

山ヶ野金山は、現在の霧島市横川町山ヶ野地域に位置する金山で、寛永十七年（二六四〇）に発見されました。日本屈指の金の含有量を誇る金山で、開発当初の三年間で約二千六トンもの金が産出したため、幕府から採掘中止の命令がでたほどでした。採掘中止から十三年後の明暦二年（二六五八）に金の採掘は許され、幕末までの二百十一年間で二千五トンの金が産出されています。

山ヶ野金山から採れた金は、薩摩藩の財源として様々なものに利用されていき、藩内の公共事業や藩の借金返済に使用されていきました。江戸時代後期になると、採掘場所も地中深部となり、金の産出量も減少してしまいます。それでも、幕末期の一年間の平均収入は三万六千両ほどで、薩摩藩第二位の収入であり、藩の貴重な財源でした。そのため、島津斉彬や跡を継いだ島津忠義も山ヶ野金山に何度も訪れています。

金の採り方

江戸時代の金を採る過程は、山から岩を砕いて外に運び出し、金が含まれている金鉱石を選んで石臼や石づつを使って細かく砕きます。その後、水と混ぜてひき白でひいて、ゆり鉢で石と金を分けます。磁石で砂鉄を取り除き、砂金を採取していました。『三国名勝図会』の金山の様子を見ると、江戸時代の作業の様子をうかがうことができます。



石づつ

【横川郷土館蔵】

濃度の高い金鉱石をすりつぶすためのもの。近代化以前の明治初期まで使用されていた。『三国名勝図会』で大きな器具を使って使用していた様子が描かれている。

【江戸時代】



石臼

【横川郷土館蔵】

山ヶ野金山で、金鉱石をすりつぶすのに使用したもの。すりつぶすことで金と石部分を分離させた。

【江戸時代】

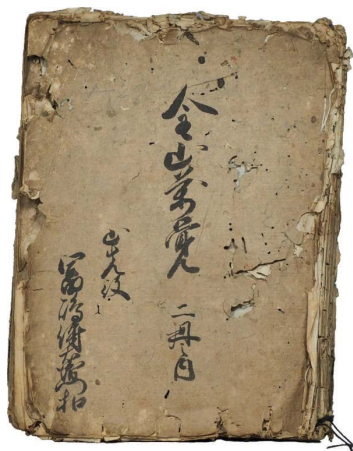
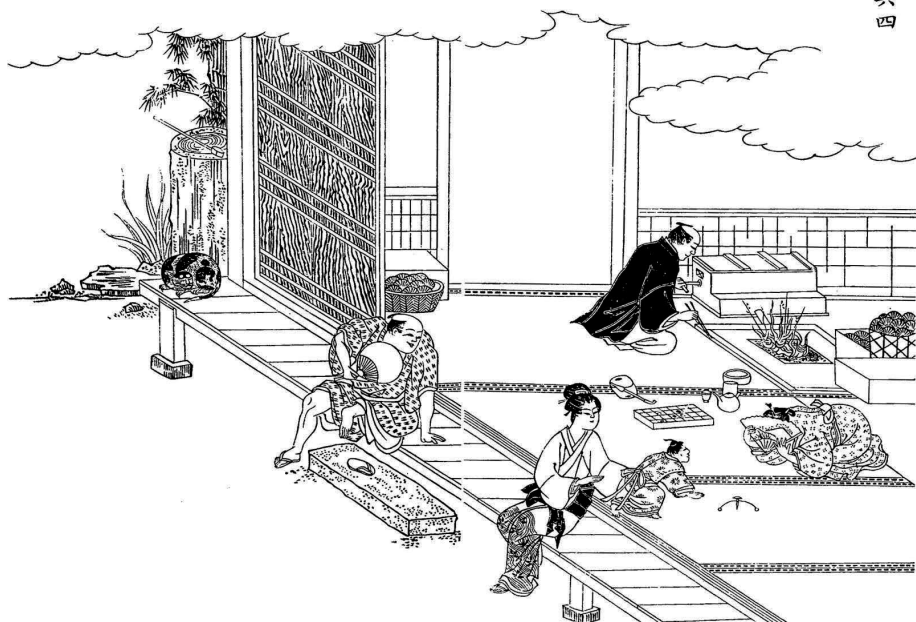
ゆり鉢

【横川郷土館蔵】

金鉱石を石と金に分けるための道具。金は水に浮かぬ性質を利用して、鉢の中に水とつぶされた金鉱石を入れ、浮いてきた石部分を取り除くことで鉢の下に砂金が残るようになっていく。

【江戸時代】





鞆ふいご

【国分郷土館蔵】

空気の流れをうみだす道具。取手を押し引きすることで風を丸い穴から送ることができる。

金属を加工するときなどに、火に風を送って炉を高温にするために用いた。

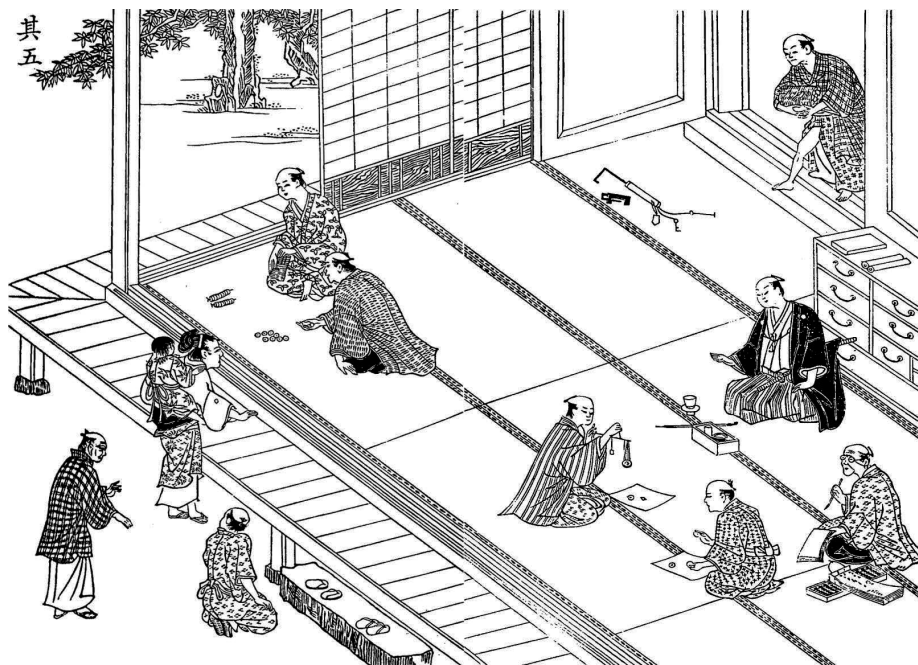
金山萬覚きんざんよろずおぼえ

【横川郷土館蔵】

万治二年（一六五九）から約三十年に及ぶ金山に関する記録。記録者は金山に勤めた富島伝右衛門尉という人物。内容は金山に関するこの覚書で多岐にわたる。

【江戸時代】

其五



金秤

【横川郷土館蔵】

山ヶ野金山で使用されていた、金の重さを量るためのはかり。『三國名勝図会』でも使用している様子が描かれており、必需品であったことがわかる。

【江戸時代】



田町遊郭の花瓶

【横川郷土館蔵】

山ヶ野の田町にあった遊郭で使用されていた花瓶。作業員で賑わっていた山ヶ野は藤本箕山著『色道大鏡』にて九州三遊郭に数えられた。

【江戸時代】

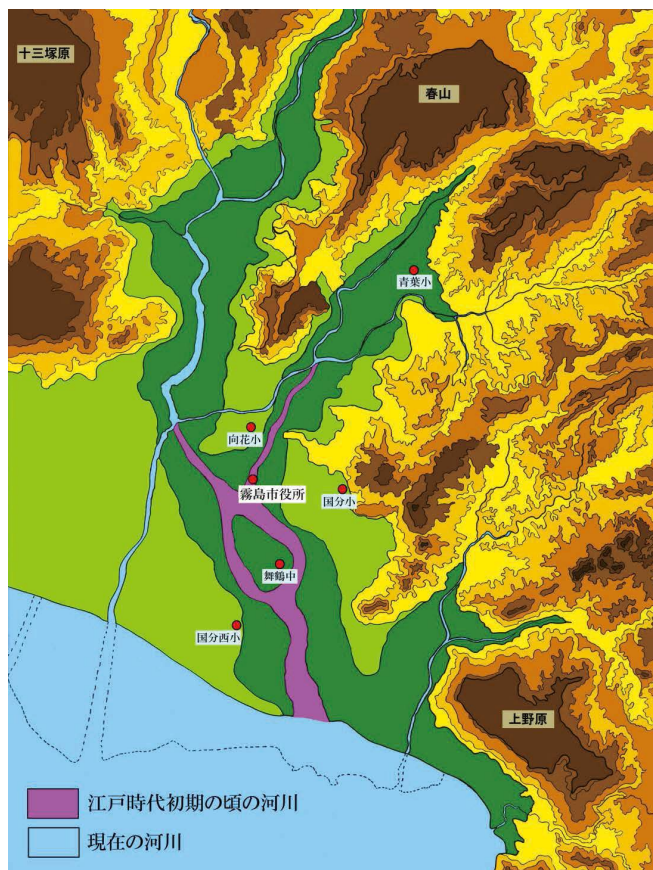


天降川の川筋直しあもりがわ かわすじなお

山ヶ野金山から採れた金の利益は、様々な公共事業に使われました。その中でも「銀一三七貫余」（＝二千七百四十両）を使って行われた大事業が天降川の川筋直しです。

現在の国分の街中を、昔は広大な河川敷をもつ広瀬川ひろせがわが流れていましたが、度々氾濫していました。寛文元年（一六六一）より川の流れを変え、その川跡に新田をつくるという川筋直しが行われます。多くの犠牲を出しながらも、四年の歳月で現在の天降川（当時は新川）の流れに直しました。

現在の本市の街並みは山ヶ野金山の金のおかげです。



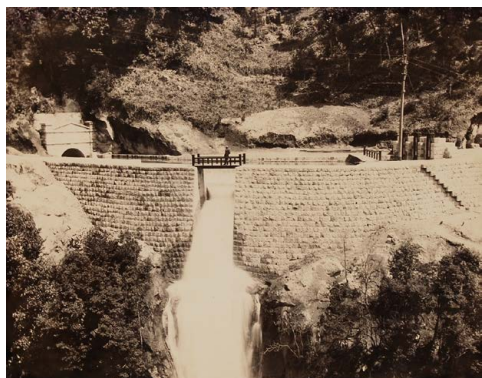
天降川川筋直し図

国分平野の地形図。水色の部分が現在の川、赤色の部分が地形図から予想される昔の河川部分。流が大きく変わっていることがわかる。

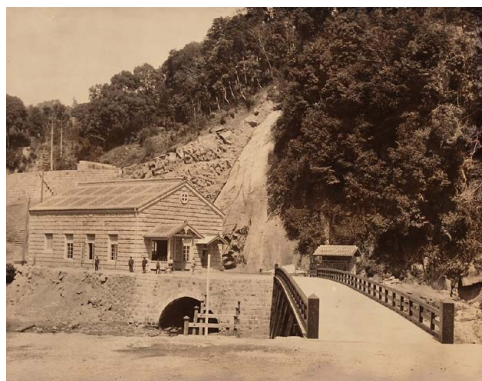
近代化について

島津忠義は西洋の技術を取り入れるため、慶応三年（一八六七）に鉾山技師ジャン・フランソア・コアニー（フランス人）を招き、西洋の近代技術を導入して金の回収率を上げました。明治十年（一八七七）には、フランス人のペー・オジェを招いて、坑道内を整備し、合理化を図ります。さらには、鉾脈の掘削には火薬（発破）を用いるなどして作業効率の向上を図りました。

明治三十七年には五代龍作鉾業館長のもと、金山の大拡張が計画されます。金山から三十キロ離れた場所に水天渚水力発電所が建設され、送電がなされると金山の設備が電力に切り替わりました。県内ではいち早い電気の送電であり、電力による機械での作業は近代化の象徴でした。



【尚古集成館蔵】



【尚古集成館蔵】



すいてんぶちすいりょくはつでんしよ 水天渚水力発電所

山ヶ野金山へ電力を送るためにつくられた水力発電所。建設当時のレンガ造りの建物は昭和五十八年まで使用されていた。建て替えがあったが、現在も九州電力の水力発電所として使用されている。

【明治／現在】

第二章

金^{かね}を返した調所広郷^{ずしよひろさと}

江戸時代後期になると、全国どの藩も借金に苦しみ、財政状況は火の車でした。薩摩藩も、五百万両にも及ぶ借金を抱えていました。

財政改革の担当者に抜擢されたのが調所広郷^{ずしよひろさと}という人物です。調所は ①借金返済期間の延長 ②専売制^{せんばいせい}の実施 ③殖産興業^{しよくさんきぎょう} ④商業資本の活用 といった様々な改革を行い、五百万両の借金を整理し、五十万両の備蓄をすることに成功します。この財政的余裕により、その後の島津斉彬^{なりあきる}による集成館事業^{しゅうせいがん}が行われることとなり、明治維新で薩摩藩が活躍する基盤が築かれました。

斉彬と対立した存在であるため、物語等では悪者に描かれがちでしたが、近年、調所の功績は再評価されてきました。

調所は地域の公共事業を推進し、本市では国分の小村^{こむらしん}新田開発や福山港^{ふくやま}の整備など、各地に足跡が残っています。

薩摩藩の政治上のトップである家老を務めた調所広郷の経歴と調所家の華麗なるコレクションを御紹介します。



調所広郷肖像

【尚古集成館蔵】

薩摩藩の財政を立て直した
調所広郷の肖像画。

【江戸時代後期】

調所^{ずしよ}広^{ひろ}郷^{さと}

調所^{あんふく}広郷は安永^{あんえい}五年（一七七六）に下級武士の家である川崎^{かわさき}主右衛門^{しゅえもん}基明^{きめい}の次男として生まれました。その後、調所家に養子に入り、茶道坊主といった低い役職にいましたが、寛政^{かんせい}十年（一七九八）から島津重豪^{しげひで}の側近として仕えるようになります。

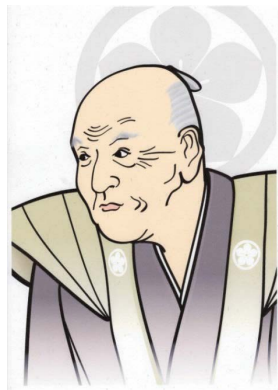
島津重豪は第八代薩摩藩主（島津家第二十五代当主）であり、藩校の創設や学問の振興など薩摩藩の文化を向上させた人物でした。一方で藩の財政も逼迫^{ひつぱく}させていました。調所が仕える頃には藩主を退いて隠居の身でしたが、未だ藩政の実権を握っている状態でした。

文政^{ぶんせい}十一年（一八二八）、重豪は藩の財政改革主任として調所を抜擢します。調所は様々な改革を行い、薩摩藩が抱えていた五百万両という借金を整理し、使えるお金五十万両の備蓄に成功します。藩主からの絶大なる信頼を得た調所は、下級武士から、藩の最高職である家老にまで登りつめました。調所による財政改革により薩摩藩は財政基盤が確立され、明治維新を成し遂げる雄藩へとなっています。

しかし、藩の財政を活用しようとする島津斉彬と対立するようになり、最後は藩の密貿易の責任を負って服毒自殺したとされています。

調所^{ずしよ}広^{ひろ}郷^{さと}像

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】
調所笑左衛門^{しやうざゑもん}広郷^{ひろさと}誕生二四〇周年を記念して、平成二十八年（二〇一六）に調所家子孫がCGアーティストの鯨島宗治氏に依頼して製作したもの。現存する三枚の調所肖像画をコンピュータ解析して製作した。



調所家所蔵品

調所広郷と霧島市には多くのつながりがあります。そのご縁で、調所広郷子孫である調所一郎氏・謙一氏より、調所家所蔵のコレクションを多く、国分郷土館に寄託していただいております。武士の命である刀や拵（刀の鞘などの装飾品）も多く伝わっており、なかには調所広郷が使っていたとされる脇差や拵もあります。

薩摩藩の家老として、藩のトップまで登りつめた調所家の豪華絢爛なお宝です。



鐔つば

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】
調所家所蔵の刀の鐔。柄を握る手を防護する部位であるが、刀を飾る装飾品の意味合いもある。

調所広郷所用鐔ずしひろさとしようつば

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】
調所家に伝わる刀剣の鐔。調所広郷所有のものとされる。
平成十五年頃、財団法人美術刀剣保存協会課長（当時）より、「京金工と極められしもの也」という評価を受けている。



ずしよひろざとしよわぎざしこしらえ
調所広郷所用脇差拵

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所家に伝わる脇差の拵。



さつまこしらえ
薩摩拵

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

日本刀の外装部分。柄に銅製・金色絵（一種の金メッキ）の柄板が巻き込まれており、上級武士の仕様のひとつである。

【江戸時代】



なみのひらやすひろ
波平安廣（調所広郷所用脇差）

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所家に伝わる脇差。調所広郷が所用していたと伝えられる。波平とは平安時代～明治時代に薩摩刀をつくる刀工たちの一派。調所家は、近衛前久（戦国時代の公卿）から通字「廣」を拝領したため、広郷は同じ字が入っている「安廣」を愛用した。同名の一口（一尺九寸）は黎明館に収蔵されている。

長さ 四十八センチ、反り 〇・四センチ



太刀用拵

たちようこしらえ

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

異常な大きさで、実用刀というより儀式用であろう。目貫（柄に巻き込まれている金具）には牡丹が二つずつ使用されており、丸十以外に牡丹も家紋のひとつとして使用している島津家から下賜されたものだと考えられる。

【江戸時代】

調所広郷所用拵

ずしようざとしようこしらえ

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所家に伝わる拵（日本刀の外装）。調所広郷所用のものであったとされる。

【江戸時代】

太刀用拵

たちようこしらえ

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

刀より大型のものが太刀であるが、江戸時代においては実用ではなく、むしろ藩主からの贈り物や下賜されるものであった。責め金具が多いのが薩摩の特徴であった。上級武士用の仕様である。



調所による薩摩藩財政改革

調所^{ずしよひろさとし}広郷は主に以下の四つの改革を成し遂げることで藩の財政

を立て直しました。

①借金の返済の延長

商人からの借金証書を藩が預かり、五百万両の借金は

二百五十年無利子で返却するようにしました。これにより毎年の借金返済の額が抑えられました。

②専売制の実施

藩内で生み出された黒糖・樟腦^{こくとう しやうのう}（医薬品や香料で使用）・寒天^{かんてん}などを藩がす

べて買い取り、他所への販売も藩が独占して行うこと（専売制）で、商品の利益を藩が得ることになりました。

③殖産興業

農業生産力の向上を図るため、各地で特産品の品質向上や、田んぼを増やす新田開発を行いました。また、薩摩焼などの生産も奨励し、藩の人々が生み出す利益を育てました。

④商業資本の活用

商人への優遇策などを用いて商業を発展させました。また、流通がよくなるように、港や水路の整備、橋の建設など交通網の整備を行いました。



薩摩琵琶^{さつまびわ}

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所家に伝わる薩摩琵琶。十九世紀頃のものと思われる。装飾には卵殻^{たまごか}という鶉^{うず}の卵の殻が扮されている。薩摩琵琶は普通の楽琵琶より小さいが、柱は大きく高いのが特徴。扇形の大型バチで奏する。

【江戸時代～明治時代】

調所広郷と霧島市のつながり

調所広郷は田んぼを新たに増やす新田開発を多く行いました。その中でも最大であったのが国分の小村新田開発です。小村は現在の広瀬地区であり、弘化二年（一八四五）から六年がかりで海の埋め立てを行って広大な新田を開発しました。この際、鹿児島五石橋建設で有名な岩永三五郎という石工が技術者として活躍し、堤防などを作っています。

また、経済流通の促進のため、交通網の整備を行った調所は、都城島津家の港として栄えていた福山の港も整備しました。ここでも岩永三五郎による港の整備が行われます。

調所は特産品による地域振興のため、美山（日置市）での薩摩焼製作を奨励します。その薩摩焼が福山での黒酢醸造に使われるようになり、現在も黒酢づくりのシンボルとなっています。調所による地域振興は今の本市の街並みにも影響が残っているのです。

ちなみに、調所という姓は、もともと大隅国府の国衙（国の役所）で諸税の収納を行っていた調所という役職が由来です。大隅国府は国分府中町付近にあったとされ、同じく府中町にあった大隅国惣社守公神社（現在の祓戸神社）の祭祀も調所家が行っていました。

はらいど
祓戸神社



小村新田水門



まるじゅうもんつきながもち 九十紋付長持

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】
調所広郷の嫡孫である広智（左平太）の長女モトが、明治十一年に平田家（島津家十五代貴久の家老 平田純貞嫡流の家）に嫁ぐに際し、島津家より拝領したもの。江戸時代後期の作。

【江戸時代後期】



調所広郷と薩摩焼

調所広郷は、殖産興業の一環として、薩摩焼の生産を振興させたことでも有名です。苗代川（なえしろがわ）付近の美山地区（日置市美山）は文祿・慶長の役（ぶんりく・けいちょうのえき）の頃からのつながりで薩摩焼を作る集落でしたが、調所のおかげで薩摩焼の生産が増えて、現在も薩摩焼の町として栄えています。沈壽官（ちんじゅくわん）はこの頃より薩摩焼生産で有名になり、幕末の薩摩藩は沈壽官の薩摩焼をヨーロッパに輸出し、外貨を獲得します。

以上のように薩摩焼の発展に貢献した調所家には、多くの薩摩焼が伝わっています。時代が不明なものがありますが、九十紋があるものや、細かい細工のものなど様々です。



にしきでからようもんりゅうまきろつかくかびん
錦手花鳥文龍巻六角花瓶
 【調所家所蔵品 国分郷土館保存】
 幕末の苗代川（現日置市美山）における作品
 で、国内用としてつくられたもの。明治期の
 ヨーロッパ輸出用の作品に比べると、金など
 の装飾も少なく、絵付けは抑えられているが、
 龍の装飾などは細かい。

【幕末】

京薩摩手桶水指

きょうさつま ておけ みずさし

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

青色の独特の発色から、明治期のいわゆる京薩摩（生地を薩摩で製作し、絵付けを京都で施したもの）の作品だと思われる。

【明治時代】



錦手菊花文花瓶

にしきできつかもんかびん

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

白薩摩の花瓶。釉薬が厚く掛かり、表面がガラス化している。口は柑子口に作られ、口縁部及び裾部には菊の花弁や葉を文様化した割文が施されている。銘文は金彩で「磯庭」とあり、明治二十八年に磯御庭焼を再興した仙巖窯の作品と考えられる。

【明治時代】



白薩摩茶碗

(十二代沈壽官作)

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所家に伝わる白薩摩の茶碗。盛金の技法で老梅の図が描かれている。作者である十二代沈壽官は、幕末～明治期に活躍し、薩摩焼の振興に大きな貢献を果たし、日本はもとより海外からも多くの賞と評価をもらっている。



白薩摩丸十紋茶碗

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

調所広郷が所用していたとされる白薩摩の茶碗。十七世紀前期に豎野冷水窯で制作された作品。島津家の家紋である丸に十文字紋が三つ配されている。



白薩摩茶碗

【調所家所蔵品 国分郷土館保存】

白薩摩（藩主層など用に焼かれた絵付けがなされた薩摩焼）の茶碗。絵付けも含めて江戸時代中期の作と鑑定する専門家と、絵付けだけは江戸時代後期に後から施したものとする専門家に分かれ、意見は一致していない。

【江戸時代】



第三章



金を造った国分の銅

幕末、様々な場面でお金が必要となります。

島津斉彬^{なりあきひろ}死後に薩摩藩の実権を握った弟の久光^{ひさみつ}は、文久二年（一八六二）に幕府から「琉球通宝」^{りゅうきゅうつうほう} 铸造^{ちゆうぞう}の許可をもらいます。「琉球通宝」とは、薩摩藩内だけで使える貨幣（銅貨^{どうか}）でした。形は当時、全国で流通していた「天保通宝」^{てんぽうつうほう}と同じ形であり、文字を変えただけでした。

「琉球通宝」を作る技術と許可をもらった薩摩藩は、こっそりと全国で流通する「天保通宝」の偽金をも铸造します。四か月で「琉球通宝」「天保通宝」あわせて十九万両を铸造しました。材料は主に銅が使用され、国分にある銅山から採れた銅が品質良好であったので重宝されました。

また、藩内の寺院が持っている鐘^{かね}などの仏具を没収し、武器製造の原料に宛^{あて}がうことを目的に、廃仏毀釈^{はいぶつきしやく}も行われました。廃仏毀釈の波は霧島からはじまり、藩内のすべての寺院が壊され、多くの文化財や文化も消失しました。

調所が財政を立て直しても、明治維新のためにはお金がかりました。そのお金は、本市と関係するところから捻出^{ねいしゅつ}されていたのです。

薩摩藩による偽金づくり

ずしよひつろと
調所広郷の改革により、財政を立て直した薩摩藩ですが、軍備強化を中心にすえた島津斉彬による集成館事業などで多くの出費をしています。そのため、島津斉彬は事業費の財源を、薩摩藩内で貨幣を造ることで解決しようとしています。しかし、幕府からは許可が得られず、実現には至りませんでした。

斉彬の意思を受け継いだ弟の久光は、文久二年（一八六二）に幕府の改革を行い、その際に幕府に琉球通宝の鑄造を願い出て、許可されました。琉球通宝とは、薩摩藩内だけで流通する目的の貨幣です。琉球通宝を使って銅・錫の購入や集成館の費用、台場^{だいは}設立など、様々な藩の出費に使用されました。山ヶ野金山関係でも支出されています。また、薩英戦争^{さつえい}による被害の復興にも役立てられました。

しかしながら、藩外で使える貨幣も欲しかった薩摩藩は、こっそりと全国で流通している天保通宝も鑄造します。いわゆる偽金をつくり、藩の財源へと宛てていきました。

四か月で十九万両もの琉球通宝と天保通宝を鑄造しており、藩の大きな収入となりました。一方でお金が増えることによる物価上昇（インフレ）など、様々な問題も起こっていました。

琉球通宝（半朱）

【国分郷土館蔵】

薩摩藩内だけで使われた貨幣。主に銅で作られる。円形に作られ、裏面に「半朱」の文字が刻まれている。価格は「當百」の二倍に設定されていた。

【幕末】



実寸大

琉球通宝

りゅうきゅうつうほう

【国分郷土館蔵】

薩摩藩領内だけで使われた貨幣。主に銅で作られる。天保通宝とほぼ同じ大きさ・価値であり、一枚で約百文。そのため後ろに「當百」の文字がある。幕府から正式な許可をもらってつくった正貨。

【幕末】



実寸大



琉球通宝の側面には写真のように「サ」の極印が刻まれています。極印とは、貨幣の偽造防止・品質証明のために押した文字のこと。薩摩の「サ」が琉球通宝を証明しているのです。

天保通宝

【国分郷土館蔵】

江戸時代後期に流通した貨幣。主に銅で作られる。一枚で百文。薩摩藩が偽金として内密に鑄造していた。

【江戸時代後期】



実寸大

江戸時代の貨幣について

江戸時代の貨幣は金・銀・銭の三種類があります。それぞれが独立した通貨体系でしたが、交換もできました。しかしながら、質の違う金貨や銭貨が出現するなどして、相場は常に変動するようになりました。

金貨

一両 $\parallel$ 四分
一分 $\parallel$ 四朱

銀貨

(秤量貨幣＝貨幣の重さで価値を決める)

一貫目 $\parallel$ 千匁

一匁 $\parallel$ 十分

一分 $\parallel$ 十厘

一厘 $\parallel$ 十毛

銭貨

一貫文 $\parallel$ 千文

換算比率

天保十三年（一八一六）

金一両

$\parallel$

銀六十匁

$\parallel$

銭六千五百文

国分の銅山

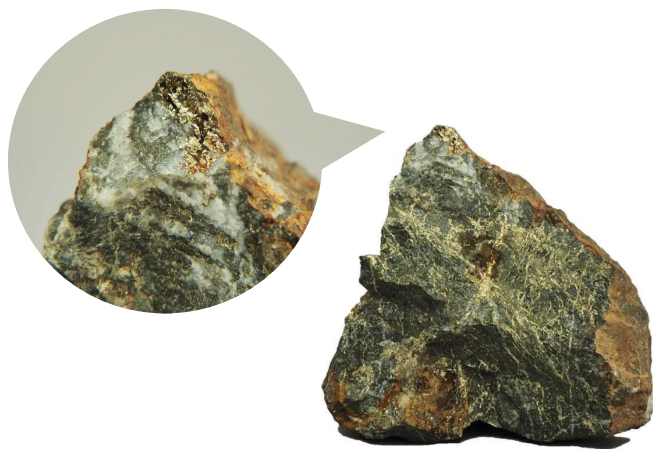
天保通宝と琉球通宝をつくるには、原料である銅そのものが大量に必要です。その銅を当時、薩摩藩内で多く産出していたのが国分銅山でした。国分銅山から藩へ上納された銅は、とても品質がよかつたとされています。

この国分銅山は、通称内野々銅山と呼ばれ、国分内野々地区にあります。元禄十六年（一七〇三）に薩摩藩によって開発されました。明治以降は経営者が変わりながらも終戦までは経営されていました。

銅鉱石（鉱染状含銅硫化鉄鉱）

【国分郷土館蔵】

国分銅山で採取した銅鉱石。国分産出の銅は生産量も多く、質も非常に良いとされていた。



カラムミ転石

【国分郷土館蔵】

銅の製錬過程で出てくる鉄くずのこと。国分銅山鉱口周辺で採取し、洗練が採掘後すぐに行われていたことがうかがうことができる。



銅山坑道入口

現在は人が入れないように
コンクリートでふさがれて
いる。



銅山坑道入口

中には水が溜まり入ること
はできない。



火薬庫跡

近代化により火薬による爆
破で鉱石を掘るようになっ
た。火薬を保管していた跡
が今も残る。



銅田駅

国鉄大隅線の途中駅「銅田
駅」があった場所。
現在は公園となっている。
銅山から採れた銅を集積し
たのが地名の由来だと考え
られる。



仏を壊す 廃仏毀釈

寺の梵鐘ぼんしゆを溶かしてお金に換えていった薩摩藩。幕末になると、藩士の中から「寺をすべて壊すべきである」という過激な意見が出始めます。これは寺院の土地や管理費、仏具をお金や武器に換え、僧侶は兵として使うという軍事転用を目的としたものでした。それが家老 桂久武かつひさたけ、藩主 島津忠義しまづただよみ、国父・久光ひさみつへと伝わり、同意が得られると実行に移されていきます。

慶応二年（一八六六）に、薩摩藩の国学者である後醍醐天皇ごたいごてんが霧島神社（現在の霧島神社）に詣でて神仏分離（神社と寺を区別すること）を神前で誓ったことを皮切りに、藩内の寺や仏教に関するものが次々と破壊されていきました。ついには島津家の菩提寺である福昌寺ふくしょうじまで廃寺となり、薩摩藩内に寺院がひとつもない状態となりました（廃仏毀釈）。

霧島から始まった廃仏毀釈のあと、奄美地域ではお寺の代わりに新たな神社が創建されていきますが、それらはすべて霧島神宮きんぐうから分霊された高千穂神社たかちほでした。霧島の神様が、シンボルとして廃仏毀釈に利用されていたという側面を指摘できます。

廃仏毀釈では寺院にあった文化財などが破壊されていきました。薩摩藩ではお金を得るために様々な文化が犠牲となっていたのです。



おおすみこくかんじあとにおうぞう
大隅国分寺跡仁王像



こくぶしげひさじおん じあとしょうかんのんぞう
国分重久慈恩寺跡聖観音像
廃仏毀釈を免れるため、地中に埋められたと考えられる。

破壊された 仏像

廃仏毀釈によって多くの仏像が破壊・遺棄されました。霧島市内でも多くの無惨な仏像が確認できます。

仏の鐘は薩摩の金へ

国分銅山から銅は多く取れるも、まだまだ銅は足りません。薩摩藩は銅を全国から買い求めて集めます。そこで藩が目をつけたのが銅を使つてつくられる梵鐘や仏具です。薩摩藩内にある寺院から梵鐘などを取り上げ、それを溶かして貨幣をつくりました。古い銘文が刻まれた由緒ある梵鐘もほとんど溶かされていったようです。

当時の銅は貨幣の鑄造以外にも、大砲などの武器製造にも使用されており、軍備拡大を図る薩摩藩においては銅やお金はとても必要でした。仏の鐘より現実に使えるお金の方が藩にとっては重要だったのでしょう。

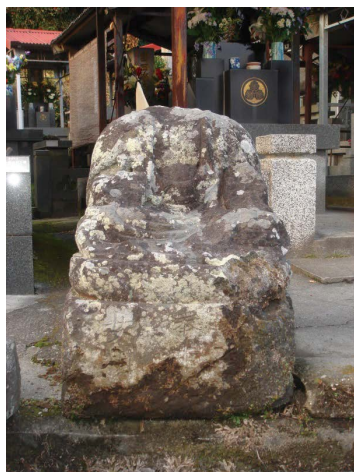
国分重久乗林寺跡菩薩



正国寺跡出土如来



国分重久岩田墓地虚空蔵菩薩像



第四章

金かねを見通す桂久武かつらひさたけ

幕末の薩摩藩の活躍は、西郷隆盛・大久保利通の二人だけが牽引したものではなく、小松帯刀こまつたてきと桂久武という家老の存在によって支えられていました。

桂久武は藩の家老として、藩内の武士の意見をまとめ、藩論を整える役目を負っていました。そのため、小松や西郷などが武力による倒幕路線に切り替えた際は、藩内の反対意見を抑え、藩論をまとめていきます。薩摩藩の軍事力強化のため、様々な努力をし、決定権をもっていた人物でした。

桂は明治維新という時代の変化により、武士は失業してそれまでの俸禄ほうろく（給料）がなくなることを見通していました。そのため、桂家の家臣たちを霧島市霧島田口たぐちの地に入植させ、土地を開墾させました。その後、入植者は増え、現在も「桂内かつらうち」という地名が残っています。薩摩藩の政治の中心人物であり、武士の今後のお金についても見通していた桂久武。これまでもあまり取り上げられてこなかった桂久武について、御紹介します。

薩摩藩家老 桂久武

桂久武は日置島津家当主 島津久風ひまき ぶんかぜの五男として文政十三年（一八三〇）に生まれ、
した。日置島津家は領地を持つ「一所持いっしょもち」という家格であり、代々家老かろうを輩出する名
門の家柄でした。安政二年（一八五五）には同じ「一所持」の桂家に養子に入ってい
ます。

一時、警衛と銅山調査のために奄美大島に渡りますが、元治元年（一八六四）に鹿
児島に戻ると藩の家老に就任し、同じ家老の小松帯刀とともに、薩摩藩のまとめ役を
担うことになります。藩政の中枢となった桂は、藩の経済施策などにも関わっていき
ます。

これまで西郷隆盛や大久保利通の業績だとされてきたものが、近年は研究が進み、
小松帯刀等の働きが大きかったことが判明してきています。桂久武も小松と同じ家老
職であり、藩内の調整役として重要な位置を占めていました。

久武は西郷と特に親交が深く、西郷からの手紙が多く残っています。また、国父とし
て実権を握っていた島津久光は、自由に動く西郷を説得するために久武を使っていまし
た。仲が悪かったことで有名な西郷と久光ですが、久武が間を取り持っていました。ま
た、西郷・大久保が武力による倒幕に政治行動を転換させた際、久武が中心となって反
対派などを抑えていき、藩論をまとめていきます。まさに薩摩藩が一九一〇年となって明治維
新に向かうことができたのは、調整役の久武がいたからではないかと思われま

藩の内部で明治維新を支えていた久武は、明治維新以降も藩政を取り仕切り続けま
した。



桂久武
かづらひさたけ

【個人蔵】

薩摩藩家老を務め、霧島田
口の開拓を行った桂久武の
写真。

【幕末・明治】

桂久武書状

(小松宛)

霧島歴史民俗資料館蔵

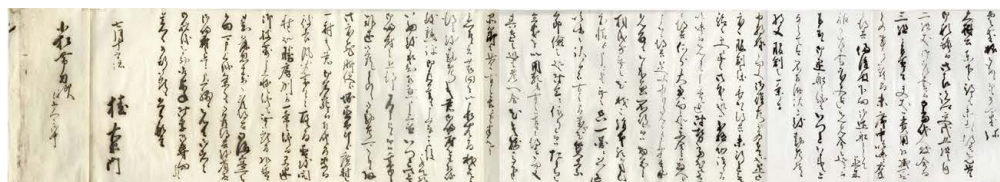


みやこのじょうけん 都城県と桂久武

明治四年の薩摩藩置県さつまはんちやうけんのと、薩摩藩は鹿児島県と都城県に分かれます。現在の霧島市区域は都城県に属しました。都城県の参事さしじ(県知事)には桂久武が任命されます。都城県の範囲は、大淀川おほふとがわから南の大隅半島全体という広範囲で、薩摩藩の範囲と飢肥藩おびはんの範囲が入り混じる場所でした。県庁は都城(現在の宮崎県都市)に開かれ、久武も県庁で職務にあたります。

県庁開庁頃の桂久武の日記が残っており、その中を見ると様々な人物と会って新しい県の行政について話し合った様子が伺えます。初めて出来た県の立ち上げという多忙を極める久武に対し、霧島の開拓地から家臣の者が度々訪れ、差し入れを行っています。また、新たに開拓地近くに住むことになった人も都城まであいさつに訪れ、久武はお酒を振舞って饗応しており、久武の霧島開拓への思い入れがわかります。

県政の開設が落ち着くと、十日間の日程で県内巡視を行います。その後は、明治政府へ県政の立ち上げ状況を報告するためか、すぐに東京へ向かい、西郷や大久保など多くの薩摩藩出身の官僚たちと面会しています。特に薩摩藩出身の実業家五代友厚ごだいともあつとよく会っています。五代は鉱山経営で成功している人物であり、山ヶ野金山を持つ都城県の参事として鉱山開発・経営についての情報共有をしていたと考えられます。実際、桂は晩年まで五代と鉱山についての情報交換を続けていました。桂久武は、優れた政治家であり、経済(お金)に関するをよく見通せた人物であったのでしょうか。



大意

お別れしてからには心にもなく御無沙汰にうち過ぎ、なお相もかわらず残暑がうつとうしい季節、いよいよお元気で長崎に滞在されお悦び申し上げます。いろいろ気を配ってのご尽力おつかいの事と推察いたします。

こちらは藩主忠義・父久光お二人ともご機嫌よく過ごしておられます。おめでたくこの上もない幸せに存じます。

私も相変わらずいつものように日を過ごしており誠に恥しく思います。

そちらは格別変った事もないようですが（幕府に武器や汽船の買い入れを禁止されている長州藩に頼まれて）イギリス商人グラバーとの汽船購入の交渉もずいぶんつごうよく運び蒸気船購入の吉報も折々伝えられまことに結構なことです。

もうとくに買い取られたことと思います。鹿児島へのお帰りをお待ち申し上げます。

解説

慶応元年（一八六五）七月十三日に薩摩藩家老桂久武が長崎にいる小松帯刀に送った書状。長崎にてイギリス商人グラバーから蒸気船を購入しようとしている小松の様子を心配する内容である。

【幕末】

桂右衛門ヨリ

藩札通用ノ令達

鹿児島県歴史資料センター

黎明館蔵

玉里島津家文書

翻刻

大意

享

今般於御園許金銀
銭紙札御取起相般、
就而は御園元之儀
紙札通用初而之儀二而、
専安田徹藏江被仰付、
此節上坂大坂表三井
方江為替取組之儀共、
尚又手堅く引越候様
被仰付越、其外掛見
間段等も被差出、諸事
取しらへ向被仰付、右は
発起之事候間大坂表
御役々
御趣意之程込受兼
疑惑茂難計候付、基
御所帯方極々御難
決成立、其上物価孫
騰貴諸人及困若候間、
兼御提紙札通用被
仰付候次第二付、此上右之
趣法相前候而は最早
救助之趣法前後
立行兼候取柄二候間、違々
札会所掛人数も可被
差出候付、夫々局々之
御趣意は相寄取扱
之訳二は候得共、第一
局々之無隔和睦一致二而
御趣意致貴徴、御趣
法相建候様可心掛旨、
大坂諸御役々一統江
可申渡候、

十月

右衛門

解説

このたび、国元（薩摩）では金銀・銭・紙札を使っている。ついで、薩摩で紙札（藩札）が通用するの初めてなので、安田徹藏へ言われたとおり、今回から大坂三井へ為替を取り組みしていたが、なおまた手堅く引き結びした。このようになったことは、大坂の表役人も、趣意を汲み取れかねると思うが、極めて難波のうえに決定し、その上、物価が高騰して人々が困苦している間、抛り所がない紙札を通用するようにとなり、安田の言う手法が崩れてしまつてはもはや助かることもできない。

それぞれ場所所の趣意は守るべきではあるが、第一は場所場所の隔たりがなく、和睦して一致団結して趣意を貫徹できるように、大坂に詰めている役人皆さんへ申し渡す。

薩摩藩は琉球通宝や藩札（藩で使える紙幣）をつくったことにより、物価が高騰し、経済が回らなくなってきた。そのような中、安田徹藏（やすだてつぞう）という人物の意見が経済問題の打開策として、藩上層部が受け入れるようになる。

本書は、そういった安田による経済政策を藩上層部が受け入れ、大坂詰（大坂の藩邸に在る藩士）の役人たちへ説明しているものである。藩上層部の方向転換には藩士からの反対もあるだろうが、物価高騰の状況ではしょうがない方策であるという説明がなされ、藩の方針への理解を藩士たちに頼むものである。

令達ではあるが、桂久武が藩の方針を藩士たちに伝えて、藩論を統一しようとする動きが見えるものである。また、藩の経済政策には桂も関与していたことがわかる。

桂久武書状

(西郷宛)

鹿児島県歴史資料センター

黎明館保存

個人蔵



翻刻

吉之助様 四郎

昨晚は桂様長度、太座
之等と跡更替續たり候、ゆるく
得ヲ御高説、多幸の至りに御座候。
右謝し奉りたく候、扱、其のおり御。
中上得承候、別紙の通、若下氏より
百機錦造之一条紋中越
尤之儀二八御座候得共、当分尋
見当二相成居候事故、今期
難取止次第二而、甚心痛
いたし候、去れハ、公然此儘
打通、理正台より沙汰にも
相成り候而ハ、之罪難免ハ
勿論、御園等にも可被成やと、
深重恐、之訳二御座候、然レ
旧年中、先君御居候成
琉球通宝鑄造之御案、
御他界後、安田轍蔵を以
幕吏江解送、大杉相済
居候末之事御座候得は、万一
及沙汰候ハ、其辺之處を以
相答候様、少々疏通取交
鶴鶴いたし候而ハ、如何御座候事と
何分不捨置事件故、御直二
御談合上候等に御座候處、多事二
取紛、致失念、大杉之至二御座候
何分御勤考を次第御知
被下候得は、至而仕合二御座候、
此旨忽々以乱者得貴意候、以上
極月廿七日

大意

(西郷) 吉之助様 (桂) 四郎より

昨晚はながい間お邪魔して、ありがとうございました。
さて、岩下方平氏より別紙のとおり百錢偽造(天保通宝の偽金づくり)の話がありました。もったものことなのですが、今すぐに辞めるといことが出来ない状態です。
しかし、このままにしていって明治政府より裁判になってしまえば、島津忠義侯が罪に問われるのはもちろん、国辱となつてしまいます。

幕政時代、先君島津斉彬が琉球通宝鑄造を届けるも許可されず、死後に安田轍蔵が幕府官僚へ便宜を図つて鑄造の許可を得たという経緯があり、万一裁判になったらその辺のことを答え、琉球通宝と混ざつて(天保通宝も)少しつくつてしまったと答えるのはどうでしょうか。

なにぶん難しい問題なので、直接相談するべきことでしたが、多くのことにまぎれて失念してしまっていました。
この問題についてお考えをいただければありがたいです。

(明治二年) 十二月 十九日

解説

桂が明治になつても続く薩摩藩の偽金作りについて西郷に相談する書状。公然の秘密として行われた偽金作りだが、その問題が明るみになると、藩主が処罰され、国辱にもなるとする。しかし、財政が厳しいこともあり、すぐにはやめることができない旨を伝えている。

明治初期は桂久武と西郷隆盛によつて薩摩藩政が取り仕切られており、偽金づくりは藩の存亡を揺るがしかねない問題であつた。

霧島を拓いた「桂内」

霧島市霧島田口には「桂内」と呼ばれる集落があります。ここは、桂久武とその家臣たちが開拓した場所のため、桂の名前が使用されています。

桂は、廃仏毀釈によって廃された華林寺（霧島神社別当寺）跡の土地を購入し、家族や家臣たちをなかば強制的に入植させました。そして、原野であった土地を開拓し、田んぼや畑、用水路などを整えました。はじめは十戸程度の入植者から始まりましたが、開拓地は次第に拡張し、入植者も増えていきました。昭和二十年ごろには桂内集落の住人は百四十戸ほどに増え、生活も安定していきます。

この開拓は、明治維新により武士が職を失うことを見越してのもので、家族や家臣たちが路頭に迷わないように自分たちで生活できる場所を作るものであったとされています。開拓費用はすべて久武が私費を投じ、開拓が始まってから三年余りで三万六千貫文を費やしました。

事実、明治九年の秩禄処分により、士族は給与が支払われなくなり、生計が立てられなくなる人たちが続出しました。久武が先の政治・経済を見通し、自身の家族や家臣たちを守りました。また、久武が始めた開拓によってつくられた田んぼや用水路は今も使用されていて、まさに霧島地域をつくった人でもありました。



（左）桂内にある田んぼ。開拓された地域には今も田んぼや用水路が残っている。



桂内
（右）桂内にある豊受神社。桂久武の顕彰碑が残る。

知られざる偉人 桂久武

薩摩藩家老、都城県の参事を勤め、霧島の桂内を開拓した人物である桂久武ですが、これまであまり注目されることがありませんでした。

西郷隆盛とも親交が深く、西南戦争では西郷に付き従い、同じ城山で没してしまいます。鹿児島県人に好かれそうな人物であるのにもかかわらず、これまであまり注目されてきませんでした。そのため、桂久武を題材にした研究もほとんどありません。

しかし、明治維新一五〇年の契機で、明治維新についての見直しが始まると、にわかに桂久武に注目が集まるようになります。歴史番組など各メディアで取り上げられることも増え、大河ドラマ「西郷どん」では、序盤からの登場シーンが多く、主要な登場人物として描かれました。

これを機会に、霧島と縁深い桂久武について様々な人に知っていただき、研究等も進んでいくことを期待しています。



桂久武の墓

鹿児島市にある南洲墓地内西郷隆盛の墓のすぐ近くにあり、西郷との関係性の近さが伺える。

エピソード



かね

より休暇な西郷どん

明治維新の立役者として知られる西郷隆盛は、温泉と犬が好きなことで有名です。西郷は明治以降、政界を一時離れ、様々な温泉に出かけています。

とくに豊富な温泉がある本市には足繁く通っていました。そのため、西郷に関わる逸話が地域に多く残っています。

西郷は霧島の地にて、温泉に通い、犬を連れて狩猟を楽しみました。地元の人々が飼っている犬を気に入った西郷は、自らの火縄銃を差し出して犬を買い受けます。犬を連れて狩をしている姿は国分出身の画家・服部英龍はつべ えいりゅうによって描かれ、上野の西郷銅像のモデルにもなりました。

西郷は霧島にいる間、多くの人から書を頼まれました。威張った人には書かず、地域の人にはたくさん書いてあげたと伝わっています。なかには十枚も求めてきた人がおり、小言を言いながらも西郷は無償で書書いていたとのことでした。

金を通じて明治維新と霧島のつながりを見てきましたが、最後は金にとらわれない西郷と霧島のつながりを御紹介します。



西郷隆盛肖像画

【国分郷土館蔵】

作者の服部英龍は国分の中馬場（現中央三丁目）出身で、明治初期に活躍した日本画家である。西郷をとて敬愛し、西郷が日当山温泉に逗留（ひたがやま）しているとき、わざわざ出かけて密かに物陰から盗み見たという。西郷の肖像は多く残るが、実際に西郷と面会した者が描いた者は少なく、希少である。英流の描く西郷の絵はどれも特徴をよく伝えているといわれ、犬を連れて狩衣姿（かりぎぬ）のものが多く、東京上野の西郷銅像のモデルになったともいわれている。

西郷隆盛と日当山温泉

ひなたやま

明治維新を成し遂げるために方々で活躍した西郷隆盛ですが、新政府の役人を断り、明治の初めは鹿児島で悠々自適な生活をしていました。日当山温泉にて西郷が休養していた際、藩主島津忠義ただしが訪れ、西郷に藩政を執るように頼みます。その後、西郷は藩政、国政に戻っていきませんが、明治六年（一八七三）には政府の職を辞めて再び鹿児島に戻ってきます。

西郷は温泉好きで有名ですが、そのなかでもとりわけ多く訪れたのが日当山温泉です。狩や魚釣りに興じるなど、休暇を満喫しており、日当山には西郷に関する逸話が数多く残っています。

なかでも多いのが、狩に関する逸話です。西郷は犬を連れてのウサギ狩りが大好きで、日当山でもよく狩に出かけています。山のなかを犬と共に大きな身体で俊敏に動く様は人々を驚かせました。西郷が犬を連れている狩衣の姿は、実際に西郷を見たという国分出身の画家である服部英龍はつりえいりゅうによって描かれました。西郷の獺好きを見事に描いています。

また、獺をする犬に対してのこだわりが強く、犬に高級なものを食べさせるなど、お金をかけていたことが有名です。国分敷根に良い犬がいましたので、西郷は欲しがり、犬と引き換えに自らの火縄銃を飼い主へ贈っています。西郷の字はとても人気で、日当山にいる際には、地域の人たちから書を頼まれます。偉そうにする人には与えず、村の人たちには無償で何枚も書いてあげたといわれています。

日当山での西郷は、政治のことは忘れ、犬には金を使い、金に関係なく人々へ接していました。



西郷から

贈られた火縄銃

【国分郷土館蔵】

敷根郷（霧島市国分敷根）の大庭定次郎氏は、すぐれた獺犬をそろえており、その犬にほれ込んだ西郷が、「犬を譲ってほしい」と熱心に頼むので、根負けした大庭は犬を譲った。そのお礼に西郷から定次郎氏へ贈られたのがこの火縄銃で、箱には「贈大庭貞次郎君獺銃 西郷吉之助」とある。

梅花

似笑凡桃競豔然
碧翁優遇百花先
風刀挾雪欲摧蕊
猶有餘香說採全

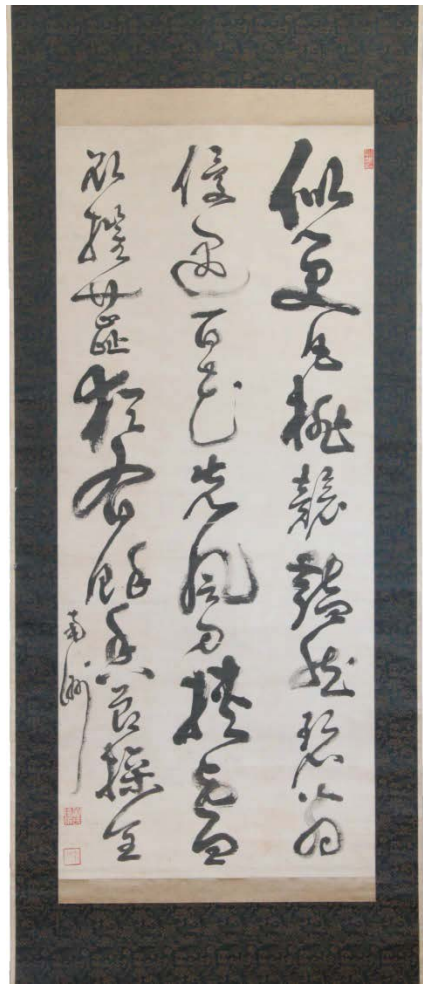
(梅花)

わら かに ぼんちう ほんぜん きそ
笑ふに似たり凡桃の豔然を競ふを、

へきわう ゆうぐひやつか さきたり
碧翁の優遇百花の先たり。

ふうとうゆき はなぞ すみ ぼつ
風刀雪を挟んで、蕊を摧かむと欲すれども、

なほ よかうせつそう まった あ
猶余香節操の全き有り。



解説

梅の花は気品の高い花で、凡俗の桃の花などが艶やかさを競って咲くのを笑っているように見え、春の神がこれを大切に、すべての花の一番目に置いているのも、尤もな事である。

白刃のような鋭い風が雪の中に挟んで花のオシベとメシベをくだこうとするが、それでも猶少しも挫けないで、芳しい香を保ち、高い節操を全うする其の意気の高さは、あっぱれ見上げたものである。

【註一】碧翁は碧帝・青帝・東帝と同義で春を宰る神、我が国風に言えば春の女神の佐保姫に当る。梅の異名を花魁（わかい）というは凡ての花に魁（わかい）て咲くからである。

山行

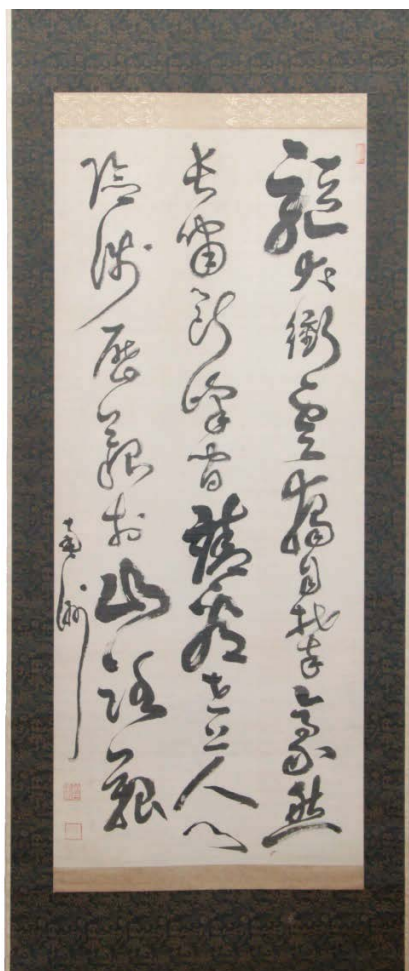
駢犬銜雲獨自攀

豪然長嘯斷峰間

請看世上人心險

涉歷艱於山路艱

(山行)

犬を駢いぬり雲を銜かいて独ひとり自みづから攀よじ、豪然がうぜん長嘯ちやうせうす断峰だんぽうの間。請こみ看みよ世上せじやうじんしん人心けんの險、涉歷せうれきさんろ山路かんの艱かんよりも艱かんなるを

解説

犬を駢り立て雲を銜き破つてただ一人山をよじ登り、断り立った峰々の間につつ立つて、意気豪然と声高らかに詩を吟じることが、まことに気持ちのいいことであるが、随分と難儀な事にはちがいない。

しかし、考へて見たまえ、人の心の険しい世間を渡って行く難しさは、険しい山路を辿り越える難しさよりも尚難しいものであるぞ。

失題

赤子慕心何処伸
青雲遼隔不容親
一貧一富如泡夢
昨日恩情今路人

(失題)

赤子の慕心何の処にか伸びむ、

青雲遼に隔てて親しむ容からず。

一貧一富泡夢の如く、

昨日の恩情今は路人。



解説

幼児が母親を慕うように、家来として君公を思う深い誠を何処に向って伸ばす事が出来ようか、青雲がはるか遠くにあつて親しみ近づく事が出来ないのは、遺憾の至りである。自分はこの度、君公の怒りに触れ、忠誠の心の落ちつく先を失つてさびしさに堪えないが、一般の人たちの人情が変貌することまた同じ様なもので、貧乏人が金持に成つたり、金持が貧乏人に成つたりと、人生はまるで水の泡の如く又夢の如くで、昨日まで恩情の厚かつた人も、今日は初めてと出会つた時のようになつてしまふ事は、何となさけない事であらうか。

【註一】「如泡夢」というのは、人生のはかなさを譬へた仏典中の有名な語「如夢幻泡影、如露亦如電」（夢まぼろしの水の泡物の影の如く、露の如くまた電の如く）から来たものである。

【註二】これは西郷隆盛、四十六歳の明治五年の末、藩主久光公の怒に触れて鎮謝の為帰国された時の作と思われる。

主要参考文献

〈プロローグ〉

- ・原口泉ほか『鹿児島県の歴史』（山川出版社、一九九九年）（全体に関する事）
- ・『霧島町郷土誌』（霧島町、一九九二年）（椎原家に関して）
- ・豊廣優貴「慶応期薩摩藩の軍制改革と諸郷衆中へ英国式軍制への対応と財源模索」（『平成29年度若手研究者研究成果報告書』鹿児島県、二〇一八年）（軍備に掛かるお金のこと）

〈第一章〉

- ・『横川町郷土誌』（横川町、一九九一年）（山ヶ野金山について）

〈第二章〉

- ・芳即正『調所広郷』（吉川弘文館、一九八七年）

〈第三章〉

- ・徳永和喜『偽金づくりと明治維新』（新人物往来社、二〇一〇年）（薩摩藩の錢鑄造に関する事）
- ・『国分郷土誌』（国分市、一九九七—一九九八年）（銅山に関する事）
- ・小水流一樹「薩摩藩における廃仏毀釈の思想的原動力」（『黎明館調査研究報告 第29集』鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一七年）（廃仏毀釈に関する事）

〈第四章〉

- ・『鹿児島県史料集第三十集 桂久武書翰』（鹿児島県立図書館、一九九〇年）
- ・『鹿児島県史料集第二十六集 桂久武日記』（鹿児島県立図書館、一九八六年）
- ・『鹿児島県史料 玉里島津家史料5』（鹿児島県、一九九五年）（桂の令達に関する事）
- ・『西郷隆盛全集 第2巻』（大和書房、一九七七年）（西郷と桂の書状に関する事）

〈エピローグ〉

- ・三島亨著、藤浪三千尋編『日当山温泉南洲逸話』（高城書房出版、一九八九年）

明治維新と霧島

お金から見る明治維新

発行 日 平成三十一年三月

編集・発行 鹿児島県霧島市教育委員会

〒八九九―四三九四

鹿児島県霧島市国分中央三丁目四五―一

電話 ○九九五―四五―五一―一

印刷 株式会社 国分新生社印刷

霧島市

教育委員会

